様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月２０日現在

機関番号：３４１０５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５２０７２９
研究課題名（和文）中国社会の近代化と陸軍大学校の人材養成システムとの関連性に関する研究
研究課題名（英文）A study on relativity between the modernization of Chinese society and the personnel development system at the Military Staff College

研究代表者
細井　和彦（HOSOI　KAZUHIKO）
鈴鹿国際大学・国際人間科学部・教授
研究者番号：90319426

研究成果の概要（和文）：4年間の研究期間中、1930から40年代にかけての中華民国の陸軍大学校の教学内容に関して研究を実施した。論文は合計3篇発表した。そのうちの1篇は学会誌、1篇は国際学会提出論文、残りの1篇は中国語論文である。学会発表は北京で開催された国際学会1回と国内学会で2回の合計3回行った。資料調査は上海図書館と台北で行い、『陸大月刊』の目録を作成し発表した。雲南、杭州、大連で史跡も調査した。また昆明で楊徳慧女史にインタビューをして、その内容を利用した論文を発表した。

研究成果の概要（英文）：During the study of four years from 2009 to 2012, I made a study of the education contents at the Military Staff College in the Republic of China from 1930 to 40's. I submitted three theses in total. One thesis was for an academic journal, another one was for the international society submitting, and the last one was a thesis written in Chinese. Academic conference presentation was held three times; one was at the Inter-national society at Beijing, the other two were at the meetings in Japan. I reserched the documentary at Shanghai Library and in Taipei, and made the table of "Luda Yuekan(陸大月刊)" and announced it. Also I surveyed local historic sites in Yun nan, Hang zhou and Da lian. In Kunming, I interviewed Ms. Yang Dehui (楊徳慧), brought the contents together, and announced the thesis concerning the interview.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、東洋史
キーワード：中国近現代史、軍事史、軍事教育史、陸軍大学校、楊杰

１．研究開始当初の背景

（1）近代中国史研究の分野において清朝末期から中華民国期にかけて軍事に関わる研究が非常に少なかった。特に日本では政治経済分野の研究は盛んで多くの研究成果が存在したが、清末からの対外戦争関連から国共内戦時期までの研究で軍事方面からのアプローチが非常に少なかった。日本の軍事史研究が高い水準を保っているのとは対象的である。中国大陸では軍事史、軍事思想、軍隊軍事教育・将校養成教育の研究成果が蓄積されているので、それらの研究成果も利用しながら、軍事の分野から研究を進めようとした。

（2）軍人が軍人のまま政治指導者として政治権力を掌握する現象が近代中国社会の特徴であるという問題意識を持って研究を進めてきていた。本研究開始までに、政治と軍事との間に密接な関係があるのではないかという仮説の下、人物研究（主に鄧演達）を行いながら両者の関係解明に努めてきた。中華民国初期には、陸軍小学校から陸軍中学校を経て、保定陸軍軍官学校で将校教育を受ける人材集団があった。もう一つは1920年代から黄埔陸軍軍官学校で行われた、イズム（主義）の注入で短期間の不十分な訓練期間を補足しようとする将校養成教育である。政治部による政治教育（ソ連式）と校長蒋介石の精神教育（日本式）がそれだった。二軍校は下級将校養成機関であって、その上位にある陸軍大学が軍事教育機関の最高学府だった。だから陸軍大学の教育内容、人材養成の仕組みがどのようになっていたのか、どのような特徴があったのかを、連続と不連続の観点から解明する必要性を実感していた。

（3）1905年の科挙廃止後から近代中国においては、将校養成という軍事教育の仕組み自体が社会的なエリートとなるための進路の一つになっていく。保定陸軍軍官学校と黄埔陸軍軍官学校で養成された下級将校は、やがて軍事学校の最高学府である陸軍大学校で再学習を希望するようになる。また政権側も高級指揮官、参謀人員養成が必要になったので、陸軍大学は必要になった。だから陸軍大学校への入学選抜試験がどのように行われていたかのか、教員はどのように供給されていたのか、教育課程内容、人材養成システムの実態を明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

（1）中国の「近代化」を軍事と軍隊、軍隊軍事教育による統制と組織化の視点から解明する。軍隊と学校は国民を創出するための装置である。両者ともに教育によって同一年齢集団を国家の維持に必要な資質を備えた個人に変換していく。日常生活からすれば、学校は平常時の組織であり、軍隊は非常時の組織である。ただ両者は表裏の関係にある。教育内容は科目による学習であるが、同時に近代の常識、すなわち科学・健康・衛生・能力主義・立身出世が教育される共通項目である。近代化の内実を高級将校および参謀人員養成教育の方面から明らかにしようとするのが研究目的の一つだった。

（2）近代中国の政治社会の特徴を、権力の所在と管理の観点から分析する。近代中国社会で100年以上も近代化の問題が解決されず、現代中国に至るまで重要課題として引き継がれてしまった原因を解明しようとするには、政治権力のあり方を考察すべだと考えるからである。近代西欧社会や近代日本社会ではまず職業意識が発生して次に職業分化が発生した。やがて職業ごとに専門職集団を形成するようになる。専門知識を備えたプロ集団が保持していたプロフェッショナリズムをキーワードとして設定し、これらを中国社会にも当てはめて考察しようとした。

（3）近代中国における陸軍大学校の全体像を事実関係に基づいて解明する。陸軍大学校が清朝末期に創建されてから北京政権、中国国民党南京政権下で43年間も存在し続けた事実は、短期間

の開校に終わった保定陸軍軍官学校と短期の教育訓練を施した黄埔陸軍軍官学校にはない特徴である。陸軍大学校の存続は陸軍大学校の重要性を物語っている。主に以下の三つの疑問を解明したい。一つは、どうして陸軍大学が重要視され続けたのか、もう一つは、各政権下で、教育システムにどのような特色や相違があったのだろうか、最後に、中国社会のどの部分に対してどのような影響をあたえたのだろうか、である。

（4）南京、重慶両国民政府時期の陸軍大学の人材養成の仕組みについて初歩的な研究を進めておく。南京国民政府時期では1932年から37年にかけて校長、教育長として大学運営にあたった楊杰に焦点をあてる。楊杰は部隊指揮官だけでなく高級参謀としての経験も豊富であり、高級指揮官養成のために陸軍大学改革を推進した。しかしながら、楊杰の専攻研究はほとんどないし、刊行資料集もなかったので、資料調査と併行しながら研究を進めた。

（5）中華民国期の陸軍大学は中国国民党政権とともに台湾に移転することになり現在に至っている。一方で中華人民共和国成立後、中国共産党は南京軍事学院を設立した（現在は北京にある国防大学である）。近代戦争を戦うための高級将校養成が目的である。人民解放軍内には正規の将校養成課程卒業者が非常に少なかった。つまり近代軍事学に通じていた教官となれる有資格者はほとんどいなかったからである。教員となる人材にも窮していた。そこでロシア革命時と同様、陸軍大学卒業生を教員として採用したのである。多くは楊杰の門弟だったという回想録が存在する。この事実関係から陸軍大学が新中国成立後に人民解放軍の将校教育に一定度の影響を与えていたことが分かるのである。

３．研究の方法

（1）全体に共通する研究方法は関連資料収集、資料の読解と整理、現地調査、聞き取り（インタビュー）の3つである。以下ではそれらについて詳細に述べたい。

（2）研究課題に関連する資料収集は計2回行った。
①上海図書館では図書館内部の中華民国時期の資料検索システムを利用して、楊杰と陸軍大学について資料収集を実施した。また同館所蔵の『陸大月刊』の全文のマイクロフィルムを入手できた。
②台北の国防部資料室と台北図書館で資料を調査した。特に国防部では陸軍大学関連の資料がすでに檔案管理局へ移転されていること、その他の資料の所在を教示してもらった。三軍大学印『中華民国陸軍大学沿革史』の全文コピーを入手できた。

（3）資料読解と整理は、陸大全般に関する代表的な書籍として『民国時期的陸軍大学』、『文史資料存稿選編』軍事機構（下）を使用し、楊杰に関しては、楊徳慧著の『楊杰将軍伝』と『楊杰将軍思想研究』の2冊の研究書を用いた。現地で収集した『陸大月刊』などの資料も用いた。

（4）現地調査
①上海図書館での資料調査実施前に、杭州で蔣百里（方震）墓を訪問した。
②昆明では楊杰に関連して雲南陸軍講武堂遺跡、楊杰の出身地である大理で大理旧市街地を調査した。
③旅順で東鶏山、監獄、二〇三高地など日露戦争に関する戦場遺跡を調査した。

（5）楊杰の直系の孫に当たる楊徳慧女史、元雲南大学歴史学部教授を自宅に訪問してインタビューを行った。2011年2月14日に実施した。

４．研究成果

（1）1932年から37年、1937年から45年までの二つの時期にわけて、陸軍大学の人材養成システムを大学運営責任者である教育長の大学運営方針から分析した。楊杰と蔣百里（方震）が中心人物である。
①1932から37年にかけての陸軍大学は「中国社会の近代化と陸軍大学」と題して、2010年2月に北京で開催された国際会議の提出論文を作成した。提出した論文は事前の準備会議で査読審議され高い評価を得たと聞いている。この論文は活字化されなかったので、「南京

国民政府時期的陸軍大学－以其組織結構与教学内容改革以及兵学研究院為探究対象」と題して2011年に中国で発表した。抗日戦争時期の陸軍大学については「日中戦争時期の中華民国陸軍大学」と題して2009年に国内の学会誌に発表した。
②今後は二つの展望が存在する。第一は中華民国期の著名な軍事戦略家である楊杰、蒋百里二人と国民党政権中枢との関わりの分析である。国民党政権の軍事的崩壊は二人を責任ある高い職位に処遇できなかったことと関係があると考えるからである。第二に、陸軍大学の教学を支えた外国籍教員の役割と楊杰が推進した教員国産化とのつながりについてである。1932年から37年まで外国籍教員の多くはドイツ人だったことから、ドイツと中華民国、日本とドイツとの外交関係の裏面史が解明できると考えている。

（2）『陸大月刊』の目録を解説付きで発表し、学術関係者に配布した。『陸大月刊』は陸軍大学発行の月刊誌である。中国国家図書館、北京大学図書館、人民大学図書館、上海図書館などが分散して所蔵している。収集に時間を費やしたが、研究期間内に目録を作成して公開することができた。今後は掲載された論文や言説の作者、内容にどのような傾向があるのかなど『陸大月刊』の中身にどのような価値があるのかを明らかにする必要がある。今後はさらに陸軍大学の他の定期刊行物、『陸大周刊』、『陸大半月刊』、『現代軍人』、『現代軍事』も収集することによって中華民国期の陸軍大学の学術水準を明らかにしたいと考えている。

（3）楊杰の孫の一人であり楊杰研究の第一人者でもある楊徳慧女史（以下敬称略）のインタビューをすることができた。インタビューは音声録音させてもらい、文字化する作業をした。楊杰の人物評価を論じる際に利用した。インタビュー後も書簡を出して連絡を維持しようとしたのだが、連絡が途絶えてしまい、現在は音信不通になっている。そのような状況の中で『楊杰将軍文集』全三冊が辛亥革命百周年を記念して2011年末に出版された。今までは楊杰の著作と言論は刊行されていなかったので、研究の進展に寄与すると予測できる。文集の企画者は楊徳慧ではなく楊徳芬夫妻である。家系図では二人とも楊杰の孫にあたるが、どちらが直系の後継ぎなのかという問題が発生した。楊徳慧もインタビューに際して、楊杰文集原稿の準備は完了しており、スポンサーの出現を待つばかりであると言っていた。刊行された文集収録資料は地元雲南と重慶で収集したと述べてあったが、楊徳慧は楊杰の研究書で私蔵資料を使用しており、明らかに保持している。資料の面は非常に重要であるから、今後の研究で明らかにされるべき問題であると考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①細井和彦、近代中国における歴史人物評価をめぐって－鄧演達、楊杰、蒋百里の生涯から考える－、鈴鹿国際大学紀要、NO．19、2012、2013 年、21－35

②細井和彦、楊杰講演『国防講話』解説と翻訳、立命館東洋史学、第35号、2012年、75－126

③細井和彦、『陸大月刊』目次と解題、立命館東洋史学、第34号、2011年、23－99

④細井和彦、南京国民政府時期的陸軍大学－以其組織結構与教学内容改革以及兵学研究院為探究対象、武漢科技大学学報（社会科学版）、査読有、第2期、第13巻、2011年、218－222

⑤細井和彦、日中戦争時期の中華民国陸軍大学、軍事史学、査読有、第3号、第45巻、2009、47－68

〔学会発表〕（計３件）

①細井和彦、南京国民政府時期の陸軍大学校の組織機構及び教学内容、平成24年度（第46回）軍事史学会年次大会、日本大学国際関係学部三島駅北口校舎、2012年6月2日

②細井和彦、中華民国における陸軍大

学校の受験を巡る諸相、平成22年度（第44回）軍事史学会年次大会、國學院大学渋谷キャンパス、2010年5月16日

③細井和彦、中国社会的現代化与陸軍大学、東南亜与東北亜：複線歴史与多元文化的再省思　学術研討会、中国北京市　九華山荘、2010年2月23－24日

６．研究組織

(1)研究代表者

細井　和彦（HOSOI　KAZUHIKO）
鈴鹿国際大学・国際人間科学部・教授
研究者番号：90319426